患者への疾患教育と社会啓発で発作・副作用・悩みをゼロに

てんかんは、日本で100人にひとりがかかる身近な疾患であっても、患者を支える環境は整っていない――。東北大学大学院教授の中里信和氏は、7月24日に開催されたてんかんプレスセミナー（主催：大塚製薬・ユーシービージャパン）において、日本のてんかん診療におけるさまざまな課題を提示。患者への疾患教育と社会啓発が、解決のカギと呼び掛けた。　（編集部）

東北大学大学院
医学系研究科てんかん学分野
教授 **中里信和**氏

てんかん発作が治療によってゼロになる認識が浸透していない

てんかんは、有病率の高さからありふれた疾患の一つとされている。一方で「精神疾患」「発作は全身的な大きなけいれんのみ」といった誤解が持たれている疾患でもある。実際は、脳の疾患であり、発作のタイプもさまざまだ。

「無意識モゾモゾ」といわれる、手や口をモゾモゾと動かすタイプ（複雑部分発作）の発作は、てんかん発作の中で最も多く見られるもの。発作が数分続いた後、元に戻り、本人には発作を起こしているときの記憶がない。しかも、これがてんかんの発作であることに気付かない医師が少なくないという。

中里氏は「医師も知らなければ患者はてんかんかどうかが分からない。治る方法があっても、これでは患者は幸せになれない」と指摘する。

てんかん診療のゴールは、「発作ゼロ、副作用ゼロ、悩みゼロ」にすることだ。「新薬の登場と外科治療の進歩で、発作、副作用をゼロにすることができるようになった。けれど、いまだに年10回起きていた発作が年1回になればいいと思う医師が多いのも事実」（同氏）。

中里氏は「失神なのにてんかんと誤診」「てんかんを理由に修学旅行やプールを制限する」等の誤ったてんかん診療の例を紹介。ただし、てんかんはもともと多様な疾患群であり、発作のタイプや原因によって治療法は全く異なる。薬の副作用も投与初期での注意、長期服用の問題、多剤との相互作用などを考えなければならない。医師にとっては覚えることが多すぎると、理解が進みにくい原因を示した。

患者自身が発作時の対応を周囲に説明できることが理想

この状況を打破するために、中里氏は患者自身が自分のてんかんについて、十分理解することを提案する。個人レベルで見れば、てんかんは理解しやすいからだ。「てんかんの原因は複数あるが、個人なら一つにしぼられる。複数ある発作のパターンも、同じ患者なら同じパターン。薬は1種類ずつ試し、効果・副作用を把握する。患者は自分のことなので、きちんと勉強してくれる」（同氏）。中里氏は理解の一助として、5月に一般向けの本（『「てんかん」のことがよくわかる本』講談社刊）を上梓。ツイッターでさまざまな情報も発信している。

てんかん発作が起きたときに周囲はどう対応すればいいのか、患者や家族が職場や学校できちんと説明できるようになることが理想だという。

また、てんかん患者が引き起こした事故の報道をはじめ、いまだにてんかんに対する偏見や差別が存在することを指摘。患者の抱える悩みの根源であり、「てんかんはどこでも誰でもなる病気。てんかんは治る、発作があっても社会で活躍できるという認識を、社会全体で持つことが必要」と訴えた。